

むすんでひらけ

札幌むすびば窓口便り 第 18 号



2013.04.01 発行
TEL 080-5720-0891
Email: info@shien-do.com
編集・むすびば受付チーム

リフレッシュキャンプ in いわき & 那須塩原相談会

つながった被災地側のネットワーク

共同代表 富塚 廣



初めての開催地

全国の保養避難の受入れ団体のネットワーク「311 受入全国協議会」(略称・うけいれ全国)は「リフレッシュキャンプ in いわき & 那須塩原相談会」を2月23、24日に実施しました。

福島県浜通りでは初めて開催するいわき市、そして県境の栃木県那須塩原市、いずれも初めての開催地です。

いわき市は「比較的線量が低い」と言われ、中通りとくらべるとあまり注目されませんでした。しかし、事故直

前はし(深川市)「大沼・駒ヶ岳ふるさとづくりセンター」の4団体が参加しました。

いわき相談会

中通りは新幹線が走るのに、浜通りは交通の便が悪い場所が多いです。といっても、いわき市は県下最大の人口を誇る都市です。いわき市へは、JR磐越東線が走っていますが、本数が少ないので、高速バスの方が便利です。私も高速バスでいわきに向かいました。

雪の積もっていた郡山から1時間30分で、雪のないいわきに到着。8階建ての駅前再開発ビルのラトブ、その6階の企画展示ホールが会場です。

今回は、CRMS(市民放射能測定所、福島市)による健康相談ブースとSAFLAN(福島の子どもたちを守る法律家ネットワーク)による法律相談ブースを併設。また、北海道からじゃがいもと玉葱を用意し(らる畑、有機農業ネットワークの協力)、来場者から大いに喜ばれました。

地元の「いわきの子供を守るネットワーク」(代表・團野和美)が開催準備と当日の運営に尽力していただき、スムーズな運営ができました。

午後2時から6時までの予定で相談会が始まりましたが、地元の團野さんも驚く130組ほどの来場者が訪れました。むすびばのブースには16組の相談があり、休む暇もないほどでした。

10歳の子のお母さんは、外遊びが減って、子どもが肥満傾向にあり、長期の保養希望とのことでした。小学校5年の双子のお母さんは、子どもだけを線量の低い場所に転校させたいとのことでした。「オンコのかげはし」の殿平さんが受入れ可能との返事をいただき、つながりました。お母さんは子どもたちと充分相談し決めたいと話していました。

フクイチ事故のあと子どもを出産したお母さんは「ここにどどまっていたいのだろうか」とずーっと悩んでいますと言っていました。

この他、「いわき出発の保養プログラムがないんですね」「毎回、保養先をさがして疲れます。毎年同じ保養先に行けるのが理想です」との声も聞かれ、今後の企画立案に大変参考になりました。

地元からは、夏休みに向けてまたぜひ、いわきで開催してほしいと強い要望がありました。

那須塩原相談会

2月24日の那須塩原市での相談会



いわき相談会(2月23日)

後の放射能プルームは中通りよりも浜通りに広がったことがわかり、子どもたちの甲状腺への影響を心配する保護者が多いのです。

同様に「福島県の外側だから」と、公的支援や民間支援から取り残されてきた県境ですが、放射能のプルームは関東平野へも広がっていきました。栃木県北部の那須塩原市はもっとも線量の高い地域の一つです。

北海道からは「むすびば」のほか、「福島の子どもたちを守る会北海道」(札幌市)、「真宗支援ネット・オンコのか



那須塩原相談会(2月24日)

こだまプロジェクト第三弾 「311 むすびばフォーラム みつめなおす福島」 高村美春さんを迎えて

報告 ぐらし隊 穴戸 隆子

2013年3月11日午後7時より、札幌エルプラザ大会議室にて、むすびば311フォーラム「みつめなおす福島」を開催いたしました。

むすびばにとって311の主イベントであると同時に、むすびばぐらし隊「こだまプロジェクト」の第3弾という位置づけになります。

第1弾は、札幌に避難している人々の生の声を届けるための座談会。

第2弾は、原発事故・子ども被災者支援法をたくさんの人に知ってもらうための勉強会。

番外編として、札幌に避難している福島女子穴戸慈さんのウクライナ訪問報告会。

そして、この第3弾は、南相馬で今も生活をしている高村美春さんを札幌にお招きしての講演会でした。

南相馬という地名を、テレビやニュースで知っていらっしゃる方も多いでしょう。

地震の被害も津波の被害もありました。そしてなにより、東京電力福島第

一原子力発電所の災禍により最も翻弄された場所の一つです。

3月11日にむすびばでも何かしようという話になったとき、私の頭の中に真っ先に浮かんだのが高村さんでした。

高村さんとの出会いは去年の6月。ブラジルのリオデジャネイロで行われたRio+20のNGOキャンプででした。避難先から呼ばれた私と、福島で生活する彼女。ほんの一瞬の邂逅でしたが、それはたくさんのことを考えるきっかけになりました。

高村さんは基調講演で、震災当時の圧



高村美春さん

倒的な状況と心の葛藤、小さな子を抱えて今福島で生きるとはどういうことかを短い時間の中で的確にお話してくださいました。

続いて北海道に避難している方3人



この日のパネラーの皆さん。右から中手聖一さん、高村美春さん、鈴木哉美さん、安斎伸也さん。進行は穴戸隆子。

【1面からのつづき】

は11時から15時まで東那須野公民館（栃木県那須塩原市）で行われました。同公民館は新幹線那須塩原駅のすぐ裏手にありました。原発の爆発の時、多くの避難者がここで新幹線に飛び乗り、乗り捨てられた車が駅周辺の駐車場にあふれたそうです。

市内に入り、バスの中で放射線量を測ると0.2 μ s/hまであがりました。CRMSの人たちが周辺一帯の空間放射線量を計測したところ、「0.3-0.5 μ s/hが満遍なく広がっていて、福島市中心部よりも高い」と言っていました。

今回の相談会を地元で準備した「那須塩原放射能から子どもを守る会」の副代表、瀧アケミさんによると、事故当時は1 μ s/hを越える場所もあり、

雨樋は200 μ s/hもあったそうです。

それでも、多くの人が無関心で、移住や保養を求める声が聞かれない、今日は誰も来ないかもと言っていました。ふたを開けると50組くらいの方々が来場されました。

むすびばのブースには、9組の家族が来られました。大田原市、日光市、那須町、塩谷町、ひかり市と那須塩原市の近隣地区からの来場者が多く、栃木県北部が広範囲に汚染されていることを物語っていました。

相談者からは「支援してくれる人がいるということがわかり、心強い」と言ってくれる人、一方で、「もっと線量の高い福島を優先しろ」と夫に言われ、遠慮しながら来た人もいました。実際、「福島ではないけど、参加して

いいんですか」と聞かれる方もいました。

いままで障がいのために保養に参加できなかった広汎性発達障害の子（小1）を札幌協働福祉会の春休みキャンプにつなぎ、参加決定しました。

今回の2カ所の相談会を終えて、全国の受入れ団体のパートナーとなる被災地側、送り出し側のネットワーク化が見えてきたことは大きな収穫です。そして、福島県内では声もあげられない状況があるなかで、県境の栃木や宮城等周辺部から声をあげることがそうした人々を励ますことになり、不安や心配を顕在化させることにもつながることを確認できたという点で意義ある相談会でした。



に加わっていただいたのパネルディスカッション。

パネラーの方たちはそれぞれ、札幌でも率先して様々な活動をされている方たちです。

高村さんが知人から「アウェーの場所へなんで行くの?」と言われたエピソードを披露してくださいました。

私は内心膝を打つような思いでした。まさに、そこが今回私がこのこだまプロジェクトを企画した理由だからです。

なぜ、札幌で話をするのがアウェーになるのか?ここが避難者がたくさん集まる場所であり、この企画も避難者とその支援者の主催であったからです。まさしく立場の違う、敵地と捉え

られたということでしょう。福島で今生活している人たちと、避難している私たちの間に、本当に大きな溝があるのか、それともそうではないのか?

高村さんと出会い、メールのやり取りをする中で、私たちの立つ場所は違えど、現状に対する危機感や、思いにそれほど違いがあるとは私は思えなくなっていました。

パネルディスカッションで、私はパネラーの皆様へ「福島の作物を食べるか?」と問いました。

避難している人たちでさえ、その答えは一樣ではありませんでした。

「避難者」とひとくくりにされること、「福島」とひとくくりにされることへ

の私たちの違和感を、会場にいらした皆さんに感じていただけたなら、このフォーラムの意義はあったのではないかと思います。

当日は、同時刻に他にもたくさんのイベントが行われていましたので、正直どれだけの人がいらしてくれるだろうかと不安でした。しかし蓋を開けてみれば100名近くの方がご来場くださいました。

これからも、私たちは311の震災および原発災害に向き合っていくこととなります。

こだまプロジェクトが、皆さんがこの問題を考えるための一助となれば幸いです。



打合せ風景から

あぶくま便り8

福島より

仮設住宅の「お茶会」のお手伝いに行ってきました。

歌を歌ったり、小話をしたり、皆さん帰り際に「今日は楽しかった。」と言って下さって、こちらまで嬉しかったです。

それにしても、応急避難のはずが、もう3年目に突入。仮設の中途半端なプライバシーの暮らしでは、様々な軋轢があるということでした。鼻歌ひとつ歌うにも気遣う生活の中で、大きな声で笑っていただけたのがよかったのかもしれない。(ほ)

むすびば、 三年目の歩みに向けて

共同代表 みかみ めぐる

3月25日はむすびばが正式に発足集会を行った大切な日です。

2011年3月16日に四名の者達が呼びかけて最初の話し合いの場を持ち、その9日後には「東日本大震災市民支援ネットワーク・札幌（通称：むすびば）」としてわたし達は船出しました。

あっという間の二年間でしたが、多くの市民・道民の方達が関わってくださり、避難して来られた方達も積極的にむすびばの支援活動の仲間になり、本当に沢山の被災者支援活動が実を結びました。実を結んでは種が出来て、その種がまた蒔かれ、常に課題が目の前に立ち現れる日々でした。

あの日から二年経ちましたが、つなみや地震による被害、原発事故による放射能汚染被害はわたし達の想像を遙かに超えて大きな社会問題を生み、被災された人々の生活に重く暗く陰を落

としています。

むすびばは2011年10月から放射能汚染地帯へ積極的に出向くようになり、街角のカフェを利用した「小さな相談会」活動を重ねてきました。その一方で全国の受け入れ活動を行っている団体と連携して「合同相談会」活動も行っています。

先日、私は東京で乳飲み子を抱えるお母さんの個別相談に対応し、お子さんが小さいので山梨県の支援者につなぐことにしました。

その翌日は郡山市の駅ビルカフェで、いわき市のお母さんから母子避難移住の個別相談を受けました。このお母さんは二年間悩み続けましたが、上のお子さんの中学卒業を機に下のお子さんと三人でご縁が出来た札幌に避難する決心をしました。

現在のいわき市は県内最多2万4000人の原発被災者を受け入れており、交通渋滞や事故が増え、病院や買い物のレジを待つ長蛇の列が日々の住民の暮らしに支障を来しています。東電から賠償を受け取っている避難者に対するねたみも相まって「避難者帰れ！」のバッシングも起こっているそうです。

そんな環境になってしまったいわき市で、このお母さんは軽い発達障害を持つお子さん達の将来を考えて悩み続けてきました。なんとか立ち立てできるように明るく前向きに育てなければという思い、事故直後の日々、何も知らされなかったが故にわが子の防御を怠っていたことへの後悔、この町にいて子ども達がどんどん健康被害にむしばまれていくのではないかという不安、そういう心の葛藤で寝込んでしまう時もありました。

札幌に避難移住を決めても常に不安



むすびばは、2年間の歩みを振り返ったポスターを作成しました（注：写真は二つのイメージを組み合わせて作っています）。

がつきまとい、心は揺れ続けているようですが、何度か行くチャンスを得た北海道で思い切り安心して深呼吸したこと、ぐっすり眠れたこと、こども達が笑顔でのびのびと走り回っていたことを思い出し、勇気を持って前に進んでいこうとご自分を奮い立たせているそうです。

福島県内だけでなく、広範囲にわたる放射能汚染地帯で悩み続ける方達は、実際にはとても多いです。避難しても悩みが多いし、汚染地帯にそのまま暮らし続けていることも悩みが多い。どうかそういう方達が沢山いるということを知ってください。そして悩んでいる大人の傍らには必ずこども達がいるということも心にとめてください。

現在、札幌市内には1,700名の被災者が暮らしていますが、札幌市が把握できていない方達もおられるのでその数はもっと多いと思います。

わたし達むすびばは、今、この時に、自分達が出来る支援活動を創造し、工夫しながら歩んできました。それはどんな困難な状況下でも、人は支え合いながら、隣人と共に生きることができるといふ大きな証になったと思います。

むすびばは三年目の道程を歩みます。デコボコ道とは思いますが、これからもどうぞよろしく願いいたします。

むすびば窓口は

各種問合せ・ご相談・情報交換にご利用下さい・・・

札幌エルプラザ(北8西3)2階、市民活動サポートセンター内にあります。

平日 11:00～18:00 オープン。

TEL:080-5720-0891
不在のことがありますので、お電話にてお確かめのうえお越しいただくのが確実です。ボランティアによる運営の為ご不便をおかけいたします。お近くにお越しの際は、お気軽にお立ち寄りください。

